機関誌『安全第一』に掲載された蒲生俊文の論説記事（一）

堀　口　良　一

解　題

以下では、当時、東京電気株式会社で安全運動に取り組むとともに、安全運動の推進団体として1917年（大正６年）４月に正式に発足した安全第一協会において中心的役割を担っていた蒲生俊文（1883-1966年）が、同協会の機関誌『安全第一』に発表した23本の記事のうち、蒲生自身の考えを述べた論説記事10本（次ページの表、参照）について、その全文を紹介する。まず今号では下記の表の１～５の５本を紹介し、残り５本については次号で紹介する予定である。

なお、今回紹介を省いた他の13本の記事は、安全運動に関する外国雑誌などからの翻訳が多数を占めている（詳細は、拙論「機関誌『安全第一』に見る蒲生俊文の安全思想」『近畿大学法学』第50巻第１号、2002年７月、を参照)。

ところで、蒲生の論説記事10本をここに紹介する意義は、とりわけ次の３点にある。

まず１点目は、これらの記事が、日本で最初に設立された安全運動推進団体の機関誌に掲載されていることから、記事の内容が日本における安全運動の草創期の状況を具体的に伝える大変貴重な資料であること。

2点目は、1920年代以降、数多くの著書を残している蒲生が、それ以前の安全運動について、どのように関わっていたのかを示す資料が乏しいため、この点を明らかにする極めて具体的な資料であること（なお、蒲生と安全運動の関わりについては、拙論「蒲生俊文と安全運動」『近畿大学法学』第49巻第2・3号、2002年2月、を参照）。

3点目は、これらの記事が、現在、極めて入手困難な雑誌である『安全第一』（総目次については、拙論「安全第一協会の機関誌『安全第一』総目次」『近畿大学法学』第50巻第4号、2003年3月、を参照）に収められていることから、公表すること自体、大きな資料的価値を有していること、である。

	タ　イ　ト　ル	巻号・発行年月
1	工場の一隅より	第1巻第1号・1917年4月
2	大乗安全第一と小乗安全第一	第1巻第3号・1917年6月
3	盲目の悲哀	第1巻第4号・1917年7月
4	照顧脚下	第1巻第5号・1917年8月
5	工場火災と安全第一	第2巻第4号・1918年4月
6	水戸大火雑感	第2巻第5号・1918年5月
7	倉庫と煙草	第2巻第7号・1918年7月
8	安全第一運動	第2巻第8号・1918年8月
9	災害の予防	第3巻第1号・1919年1月
10	照明と安全第一	第3巻第3号・1919年3月

凡　例

- 原文は縦書きであるが、横書きに改め、また旧字体や繰り返し記号は一部改めた。
- 読み仮名のルビは省略したが、注釈的なルビは原文どおり再現した。また、誤植と推測される場合、〔ママ〕とルビを振った。
- 原文にある挿絵は全て省略した。
- 原文のページ数は、各ページの下部の〔　〕内に示した。
- （　　）内は原文、〔　　〕内は堀口による注である。

〔『安全第一』第1巻第1号（創刊号）、1917年4月、所収〕

工場の一隅より

東京電気株式会社庶務課長　法学士　蒲生俊文

職工長Aは今朝工場の中に張り出された安全第一講話会の掲示を見乍ら工場を後にして事務室の安全委員B氏の前に立つた、

職「旦那一寸伺ひ度いのですが

係「何ですか

職「比頃安全第一協会と云ふのが出来たつて何な事をするんですか

係「あれはネ、工場の中の危険い事を除いて、皆が安全に仕事をして行かうと云ふのです

職「へえ、どうして除くんです

係「サアそれは色々方法が有るだらうがネ、お前はこの工場で此頃機械に盛に金網を張つたり囲ひをしたりしてるだらう

職「へえ、西山さんや川淵さんが来て指図をして取り付けて居ます

係「あれが安全装置と云ふて機械で怪我をすることを防ぐ仕掛けなんだヨ

職「でも、あれは仕事が早く出来ないつてこぼして居ますよ

係「仕事の早さは少し位減つても怪我が無くなりや仕合せぢやないか

職「へえ……成程……武力板の赤く塗つたのに白「ペンキ」で注意だの危険だのと書いて有るのも矢張り其の訳ですか

係「そうそう、あれも注意をしないと危険い目に遇ふから気を付ける様に記して有るんだヨ

職「さうですか

係「あの工場の入口に赤い縁を取つた掲示板が有るだらう

職「へえ

係「あれは安全掲示板と云ふて色々と注意書きやら怪我の写真など

〔36〕

が出て居るのだから常に気を付けて見て置かないといけない

職「左様ですか、此れから気を付けましよう

係「それから工場に投書箱の赤いのが掛けて有るけれども、あれは君達が仕事の遣り方や其他に危険があるから是非共斯様斯様に改良し度いと云ふ考があるときにそれを入れて貰ふ為めに出してあるんだよ

職「私共の考をですか

係「さうサ、此の事はネ委員がやきもきしたつて工場の人が皆で力を合せてやらなくちやホントに出来るものぢやないよ、それだからあんなものを出してあるのサ

職「成る程ネ、然しあの掲示して有る画に安全第一と書いて有るのは一体あれは何ですか

係「あれか、あれは安全を計ることが第一だと云ふ事だヨ

職「あんまり聞かねー日本語ですネ

係「それは英語でセーフテイー、フアーストと云ふのを日本語に訳して安全第一と云ふんだネ

職「へえ、あれや舶来ですかネ、私や西洋物と来ちやウツカリ近寄れねえネ

係「どうしてだい

職「此間友達の処でウイスケとかウイスキとか云ふ西洋ものを呑まされてひどい目に遇つたんですが西洋ものにやこりこりしました

係「さうかい、然かしお前だつて帽子をかぶつたり靴を穿いたりするぢやないか

職「それは便利だからしますがネ帽子を冠つたつて靴を穿いたつて正直

日本人でサア

係「そこだよそこだよ、安全第一と云ふとネ舶来ものだけれども、あれや昔から居る日本人が洋服を着たまでの事サ

職「それは何の事です

係「お前なんか講談でお馴染の塚原卜伝と云ふ剣術の名人が有るだらう

職「へえ

係「あの人なんか安全第一の名人だ

職「へーえ

係「あの人の弟子に偉い腕の冴え

〔37〕

た人があつたものだから近々に免許皆伝の都合になつて居たのサ

職「へえ

係「処が或る時先生の処へ行く途中に暴ばれ馬がつないで有つて、其後の処を廻ると後足でポンと蹴上げたもんだネ

職「へえそれから何うしました

係「流石は心得が有る人だからヒラリと体をかはしたネ

職「ナール程

係「此を見て居た人達は感心して塚原先生が如何に名人でもアー身軽には働けまいとワイワイ騒いだものだ

職「全くですネ、それぢやすぐに免許皆伝だ

係「処が大違ひサ

職「へえ

係「此を聞いた塚原先生は大に嘆いて、まだまだ許はやれないと云はれた

職「何て分らねえ先生でしようネ

係「そこで其土地の人々が今度は先生の帰り道に例の馬をつないで置いた

職「先生は何うしました

係「此を見た先生は遠くの方から廻り道をして帰つてしまつた

職「意気地の無え先生ですネ

係「処が村の人々が先生に何故遠くから廻り道をしたかと尋ねると……

職「何と返事をしました

係「先生の云ふ事には味がある、武芸と云ふものは身を護るものだ、要も無いのに危険な処へ飛び込ものはまだ到らない証拠ではないか、暴れる馬と見て取り乍らわざわざ其側を通るのは心得の無い馬鹿もののすることである

係「へーえ、此にや恐れ入りましたネ

〔38〕

係「処が今云ふ安全第一サ、昔は安全第一なんて文句は有りやしないがネ、訳は昔から分つてたんで安全第一ツたつて日本人が洋服を着た丈けの事サ、西洋物は御免だなんて嫌ふ必要はないよ、正宗をサーベルへ仕込んだ様なものだ。

職「いや分りました、それぢや私も此れから修業をして安全第一をやりましよう

係「よく分つてくれて有難う、ついちや掲示がしてある通り、今晩安全第一講話会と云ふのがあるからお前の方のものを皆連れて来てくれ玉へ、職「承知しました

其の晩食堂で催された安全第一講話会には二三の委員が演壇に立つて多数の職工に安全装置の模様やら仕事のやり方や注意力の必要な事などを説き聞かせて散会する迄には三四時間を費やした

翌くる朝は空のドンヨリした鬱陶敷い日で有つた、係の者が卓子に向つて事務を取つて居るときに卓子の上の電話機が続けざまに鳴つた、受話機をはづした係員は

職「旦那、怪我人が有りましたから来て下さい

と云ふ通告に驚いて工場に駆けつけた、係「誰だい、職「山田です、旦那「プレス」で指を落されました

係、さうか安全装置までしてあるのにどうして怪我をしたんだらう

職「旦那、昨夕の演説会に出る様に云つたんですけれど文句を云つて帰つてしまつたので旦那方の御話を聞はぐつたんで、安全第一の奴がきかなかつたんですネ、係「不注意な奴だナ、職「当り前に仕事をして居りや怪我なんか出来ない様に成な〔ママ〕つてるのにわざと側から手を入れてやられたんです、係「出来た事は仕様がないから早く医局の方へ連れて行つたらよからう、何でも安全第一だよ、日本人は昔から安全第一の達人が多かつたんだから注意をして怪我をしない様にお互に気を付て呉れ玉へ、職「承知しました、係「あれを見玉へ

指さす処には調帯（ベール）が盛に廻つて居るすぐ側の柱に大きく青いペンキ塗りの鉄板に白い文字が浮き出て居る、「自分で注意をするよりよい危険の予防法は有りません」。

〔39〕

〔『安全第一』第1巻第3号、1917年6月、所収〕

大乗安全第一と小乗安全第一

法学士　蒲生俊文

茲に大乗安全第一と小乗安全第一と云ふ珍無類の名辞を掲題とした、敢て奇を衒つて世人の耳目を聳動しやうと云ふのでは無い、只余の云はんと

する意味を直截的に表示するに最も便利で有ると信じたからで有る、大乗と小乗の語は此は今迄仏教語として社会に行はれて其外には用ゐられて居なかつた、然し用ゐ得可くんば之を他に転用するも一向に差支は無いと思ふ。

然らば大乗及び小乗とは何を意味するので有るか少しく余論に亙るの嫌は有るけれども此を説明する順序として先づ仏教語として用ゐられ居る本来の意義を簡単に陳述すれば、大乗とは之を要するに仏教の進歩派で有り、小乗とは仏教の保守派で有ると云へる、従て小乗の輩は釈迦仏の一言も違背すべからずと機械的に之を解して一歩も其以外に出でざるの徒で有り、大乗の徒は釈迦仏によつて宣明された精神の光を何処までも発揮させて行かうと云ふ輩で有る、猶一方から云へば小乗の輩は自周独善で、此の世を嫌つて山に入り独り自ら救済し尽せりとなす消極者なるに反し、娑婆即寂光土で有るとし自来得度先度他で有るとして、我人共に成仏得脱せん事を計り従つて積極的に其の精神を発揚する処に大乗の

〔54〕

魂が生きて居ると思ふ。

斯く考へて見ると、其大乗と小乗との価値の比較は云ふ迄も無い、此の思想を直ちに安全第一主義に転用して見るのに、亦頗ぶる好都合を感ずるので有る、即ち安全第一主義の小乗なるものは只専一に自己一身の安全を計るに汲々として、然かも消極的に危害を避けて遠く山に入るが如き態度に出づるに違ひ無い、世上多く安全第一は退嬰主義で、国民の元気を阻害し、国家有用の事業をして頓挫せしめるに至るかも知れないなどと大に悲観的気分を漂はす浅見者流の出づるのは安全第一と云ふ意味の内に又此の小乗思想も包含され居る為めに其方面ばかり見て居るからで有ると思ふ、此は所謂群盲象を評するの愚を繰り返へすもので有つて、具眼者の耻づべ

き事で有る、乞ふ案ずるを止めよ、安全第一の真価は其の大乗なる処に在る、自己の危険を防止すると共に他人即ち社会の安全を計る為めに各種の手段を講じ消極的に害を避くるに止まらずして積極的に害を除却して掛るので有る、従つて各種の冒険的事業と何等矛盾する処が無いばかりか、寧ろ此と併行して始めて冒険的事業に確実なる効果有らしめるもので有る、元より此の主義を実行しても直ちに社会万般の事物の凡ての危険を除却し得ると云ふのでは無いが安全第一の主義たるや所謂不必要なる危険は其の害に曝されないと云ふ処に在るから、止むを得ざる危険は冒すと云ふ事が必然之に伴つて来べき思想で有る、世上多くは此の関係を知らないで、事実自分の衷心には自己の安全を思はないではないが猶此の浅見に左右せらるる可〔ママ〕隣の人士も無いでは無い、単に害を避けると云ふに止まれば小乗の境〔ママ〕致を出でずして、足一歩も戸外に踏み出すことすら出来ない、否、家内に在つても生きて居ることすら危険で有ると云ふ極端な結論に達するかも知れない、私は左に最も極端なる冒険の一つで有る処の戦争の血腥さかるべき一例を取つて直ちに大乗安全第一の精神を説明し度い。

〔55〕

川中島の一戦に千古の武名を走せた上杉謙信が未だ長尾影虎と云ふた昔、小人数を率ゐて敵の大軍に城を囲まれた事が有つた、部下の一人進み出でて申すやう、「敵軍其数算なく、野と云はず山と云はず、其旗風に靡いて居りますれば、此の小勢を以ては持久して防戦覚束なし、潔よく門を開き打て出で、切り死致す外御座りませぬ、」此を聞いた影虎打笑ひつつ「いやいや其許の言ふ処一理なれど、余が思惑は然らず、敵寄せたりと聞き、天主に登りて敵軍の動静を見るに、あの大軍に似もやらず、後へに従ふ兵糧方の少なきは到底長逗留は覚束なし、必ず不日退却致す可ければ、其期を外さず後より打て出でなば如何程の大軍にても此を破るに難かるまじ」

と泰然として申聞けた、果せる哉、再三日の後暗夜に乗じて敵は密に退軍を始めた、日夜之を監視して居た影虎の軍勢はスワコソと影虎の下知に従ひ打つて出で滅茶々々に狼狽したる敵の大軍を打ち破つてしまつたのである。

此は只史上の一閑話に過ぎないが、よく安全第一の精神を発揮した影虎に讃辞を呈する外は無い、我は冒険を非とするものでは無い、冒険元より可なりで有るが、然し安全第一の精神を発揮しない冒険は無謀の猪武者で有つて達人の顧るべきものでは無い無謀の冒険が常に予定の効果を収める事が出来ないで、徒らに且つ馬鹿らしくも無益に悲惨な結果を生ずるに至る事は日々の新聞の無心な記事にさへ見る事が出来る。

吾人は茲に於てか、大乗的精神の下に設立せられたる安全第一協会が大声叱呼して世人一般の覚醒を促して居る事を感謝せざるを得ない、何処にか今に痴人夢を説くの輩有つて、猶ほ安全第一主義を非なりとするか。

〔56〕

〔『安全第一』第1巻第4号、1917年7月、所収〕

盲目の悲哀

法学士　蒲生俊文

さてさて眼あきは不自由なものぢや。

と、一夕講莚の灯火を一陣の風に吹き消されて、周章てたる門弟を顧ながら冷笑した塙保己一も、幸に胸中に万巻の書を蔵したればこそ、此んな事が云へたので有る、然かも猶

明月は座頭の妻の泣く夜かな

と、彼の妻女をして、皎々と冴え渡りたる明月の前に泣かしめざるを得なかつた。

況んや、義太夫壺坂の沢市に

「三つ違ひの兄さんと、云ふて暮して居る内に、情なやこなさんは

と、お里を嘆ぜしめたるもの、盲目の然らしめる処で有つて、我慢にも眼あきを冷殺し去る訳には行かなかつた。

爛漫と咲き乱れたる花に対しても、皎々と冴え渡りたる月に対しても、或は又皚々たる一面の銀世界に接しても、其処に何等充分なる感賞をなすの能力が無い、凡て色彩の変化に因る処の美に対しては交渉極めて微弱で有つて、其が劇で有ると、絵画で有ると、将た自然で有るとを問はず、他の世界の存在として考へなければならない、「探りても見ん今日の月」の一句に如何に盲人の心裡状態が窺はれるで有ろう。

此等は只生活と云ふ事に不自由の無い人の事で有るが、若し夫れ視力を失つた為めに生活の手段を失はなければならないものは、只に其の悲惨なる事本

〔56〕

人一個に止まらない、家族相擁して路頭に迷はなければならないのは珍らしくない。

然るに実際世間の人を見ると、相当の智識階級の人でも然りで有るが、其の以下の人々が自他の眼の安全第一を忘れるものが殆んどザラで有るのは寒心の至りでは無いか。

生来の盲人は誠に気の毒ながら論外として、凡そ後天的盲人たるものの依て来る原因を考へて見ると先づ大別して二通りに分けられると思ふ、第一は疾病で有る、此等トラホームで有るとか、膿漏性結膜炎で有るとか云ふ様な眼の病で有る、第二は負傷で有る、仕事中に物が飛んで来て眼に当つたとか、薬品が爆発して眼を潰すとか云ふ様なもので有る、其外有毒瓦斯に触れたり、又は激しい光線に打たれたりするのも、此の内に入れてよ

いと思ふ。

既に病に罹り又は負傷してしまつた以上は如何にしても仕方が無いから、充分に其道の医師の治療を受けて回復に努力する外は無いが、未だ雨降らざるに先づ雨具の用意をするのが安全第一で有る。

眼の疾病予防に付いては別に其人が有らうと思ふから茲に私の素人考を述べない事にする、只負傷に対する予防として一言述べて見やう、古への書物に「病已に成りて後之を薬し、乱已に成りて後之を治む、譬へば尚ほ渇して井を穿ち闘つて兵を鋳るが如し、亦た晩からずや」とある、蓋し千古の名言で有る。苟も眼が何等かの危険に曝されて居る場合には是非共相当の予防手段を講ずる必要が有る。

試みに今「デイ、エス、バイヤー」氏の著書の中から次の表を抜き出して見ると。

一九一二年六月に終る一年間の眼の傷害（マ州工場事故）中
安全装置と特に関係あるものの表

傷害原因	報告ありたる傷害全数	失明
一、調帯（調帯破壊三　竿ニヨル打撲二）	五	——
二、電光	二七	——
三、アブラシヴホイール	五六	二
四、ハンマリング（槌ノ破片及ビ屑等	六八	一五
工具及材料ノ飛来）	三三	五
〔57〕		
五、機械工具（磨碎機、鋸等）	一六	——
六、鎔解金属	四七	四
七、鋲打	一六	三
八、水及油類ガラス瓶破裂	七	一
合計	二七五	三〇

こんな数字と原因とを見る事が出来る、此は工場に於ける傷害で有つて、工場外にも傷害の機会は有り得るけれども、工場に其機会が多いと思ふから此の表を土台にして話を進め度い。

一、破損「ベルト」より起る事故、此は多く「ベルト」を結合するのに「フツク」や「レーシング」を用ゐるに原因する様で有る、此は「ベルト」の力を充分に発揮させ難いから、継目なし「ベルト」を用ゐれば大に此危険を除く事が出来る、殊に適当なる「ベルト」安全装置を之に付ければ実際結果は良好で有る。

竿で「プーレー」に「ベルト」の掛け替へをなすは誠に危険なやり方で度々多くの事故を生ずることである。此は余り勧め度い事でないが、必要の場合には尤も熟練した人に極度の注意をしながらやらせるがよい。

二、電光より起る事故、此は大方「スウイツチ」とか「フエーズ」とか「スターチング、レオスタツト」等の部分を閉ぢ込んで置けば免れ得る、必要の場合の外は此等の部分に触れしめないと云ふ規則は又大変効力が有る。

三、「アブラシヴ、ホイール」より起る事故、此は蔽ひとか排出装置とか安全装置とかを設備すれば害を除く事が出来る、猶保眼鏡（ゴツグルス）を用ゐる事が必要で有る、此眼鏡は「グラインデイング」が始終行はるる処では特に必要で有る。

四、「ハンマリング」及び「チツビング」等より起る事故、此事故が失明を来すことが多い様で有る「チツビング」に保眼鏡（ゴツグルス）を用ゐる事は最も必要で有る、此の原因が多く頭が蕈の様にササクレ立つて居る工具を用ゐる事に原因する事が多い、

〔58〕

此は工人をして充分に工具の手入れを注意さすべきで有る。

五、機械工具より起る事故、磨砕機(ミリングマシン)や「シエバー」等を使ふ工人の眼を保護するには特に〔ママ〕砕片除けを取り付ける事が望ましい。

六、溶解金属より起る事故、此には是非保眼鏡(ゴッグルス)を用ひなければならぬ、眼鏡によつて危害より救はれた例は幾らもある。

七、鋲打(リベテング)より起る事故、此亦適当なる保眼鏡(ゴッグルス)の使用を必要とする。

八、水及油類「ガラス」瓶より起る事故、此には相当の保護装置を付けなくてはならない。

斯様に考へて来ると始めの表に有る丈けの事故は全部予防し得る様に思はれる、そうすると此の表は報告ありたる全数五九三（失明六三を含む）より特に安全装置に関係あるものとして拾ひ上げた数で有るから、全数の約半数は予防し得べき事柄で有ると云へる。

他の安全装置については今云ふ暇が無い、茲に保眼鏡(ゴッグルス)に付いて一般的の事を述べて見度い、一体保眼鏡(ゴッグルス)を用ゐるときは硝子を構成して居る不純物の為めに視力を破壊する事がありはしないかと云ふ問題が有る、此は硝子が劣等品で有れば有り得る事で有るが、今は割合に安価で信用し得る保眼鏡(ゴッグルス)を購入し得る故大概問題の解決は付く筈で有る、又此が使用は頗ぶる不愉快で有ると云ふ様な事情もあれど、此も用ゐ馴れれば数日にして問題は消えてしまふ、兎も角も保眼鏡(ゴッグルス)は出来る丈け軽く且つ良質の硝子を使用したものを使ふのを上策とする、又硝子が容易く抜き差しが出来れば硝子が壊れた時に取り替へが出来て便利で有る、金属の部分は凡て銹止めになつて且つ容易に曲げて顔に合ふ様に出来れば申分がない、殊に眼鏡の側に「サイド、プロテクタ」を付ける事を必要とする。

保眼鏡(ゴッグルス)も仕事によりて特別の装置にする事を必要とするが、茲に一例を云へば「チツビング」をやる人

が用ゐる眼鏡は容易に破壊しない為めに特に厚い硬質硝子で作られて居る事が大切で有る、而して金網か何かの「サイド、プロテクター」が付かなければならぬ、塵埃や瓦斯多き処の仕事にはピツタリと皮膚に接する様に作られた眼鏡が必要で有る、従つて縁にはゴムが付けてなければなるまい、「グラインデングをやる処では約二吋半もある処の大きい眼鏡を用ゐる方がよい、此は保護の範囲が広い事を必要とするからで有る、或は「ボイラー」の火夫は火のきらめきを避ける為めに琥珀色又は少し燻んだ色のレンズを用ゐるのを至当とする、或は鋼鉄溶炉工人は一様な色合の「コバルト、ブルー」色のレンズを必要とする、又「オキシ、アセチリン」瓦斯を使用して「ウエルヅ」をやる場合には暗緑色の「レンズ」が最も好い「エレクトリツク、アーク」で「ウエルヅ」をする時には赤と青のレンズを合せて用ゐるときは其の依つて生ずる深青紫色に依つて「ウルトラ、バイオツト」光源に対して眼を保護することが出来る、此んな具合に調べれば益々出て来る。

以上私は盲目の悲哀と其の予防に付いて少しばかり論じて見る事が出来た、世上斯くの如き危険に曝されて居る人々及び此等の人を使用する人々は此等を川向の火事視しないで特に深い研究を促さずには置かれない。

今迄は人の事だと思つたに

と泣き叫んでも、既に害至るの後は如何ともし難いからであるから、眼の『安全第一』は日常感銘して実行すべき事で有る。

〔60〕

〔『安全第一』第1巻第5号、1917年5月、所収〕

照顧脚下

法学士　蒲生俊文

私は先頃所用を以て相州鎌倉に訪れた事があつた其節同地五山の一なる円覚寺に参詣して幽邃な、あの立樹の蔭に幾百年の苔の道を踏んだ、其時ふと見ると禅堂の入口の処に些やかな木札が掛けてあつて其れに「照顧脚下」の文字が鮮やかに現はれて居た、私は何となく親みを感じて暫く此文字の前に立ち止つた、「照顧脚下」私は親友「安全第一」に御目に懸つた様な気がした、照顧脚下又は一層簡単に看脚下の文句は禅宗では平生使ひ馴れたものであるさうだ、此文字の書いてあつた木札は履物に気を付けよと云ふ意味で掛けてあるものであろう、けれども此文句は只此の些やかな木片に書いて下足の番人たらしめて置くばかりでは余りに勿体ないと感じた、寧ろ此の木札から浮き出させて、床の間へでも御招待すべきであらうと思つた、履き物の番人たる藤吉が関白太閤殿下と成つても元より同じもので、其処に何の異なつた価値もない、照顧脚下の文句が別の文句に変じた訳ではない、草履を取る手に天下を取る力が元より籠つて居るので有る。

文字通りの意味で、脚下に気を付けろと云ふ丈けでも相当に「安全第一」が働いて居る、五月号の「セーフテイ、エンジニヤリング」雑誌に次の様な画が出て居た、watch yoar〔ママ〕 step と書いて有る、矢張り脚下に気を付けろと云ふ事で有る、脚下へ気を付けるには周囲にも気を付けなければならない、が、脚下に気を付けた丈けでも如何に安全が保たれるか、限

が知れない位のものである。

昔希臘の哲学者が星ばかり見て歩いて溝へ落ちたと云ふ話もある、「脚下の明るい内に」とか「人の事より自分の脚下へ気を付けろ」とか色々脚下に関係した語があるが、脚下が不安定では円満に生存する事が出来ない、脚下に気を付けるのが日々の安全第一である。

古語に「虚空呵々三声、脚下何不見」と云ふのがある、此は慈雲尊者と云ふ人の語である、古い語であるから保存行為として虫乾をする為めに茲へ出したと云ふ訳ではない、自然は古いけれども同時に日々に新しいものの魁である、此の語も亦即ち我々の日々新なる生活の前面に当つて毎日生き生きした光を浴びせかける太陽の様に輝いて居る、脚下何不見 watch your step！日月炳乎として照して居る、何故其の光を見ないか、見ざるは自ら暗に面する処の者の罪である。

見ると云へば物を見るのには眼の力に依るのであ

〔54〕

るが、眼には二通りある、肉体の眼と心の眼である眼光紙背に徹するなどと云ふが、此の眼は心の眼である、心眼明ならざれば、折角備つた肉の眼は只物理的に働くだけで節穴と大差なき有様になつてしまう、此と同様に脚下と云ふても、此の脚下にも肉体的の脚下と心の脚下とがある、照顧脚下も心の脚下に辿り付いて始めて真実の意義が現れて来る訳である。

脚下に気を付けない為めに道普請の溝の中へ陥ちたり、切れて居る電線を踏んで感電したり、石に蹴つまづいて大怪我をしたり、或は踏抜きをしたり、溶鉄の中へ足を突込んだり、或は大切なものを蹴飛ばしたり踏潰したり其他色々の事をする事が多くはないか、況んや此等物質的関係ばかりで無く、精神的にも考へて見れば同じ様な場合が多くは無いか、

円覚寺禅堂の入口の小木片は照顧脚下、照顧脚下と常に吾人の前に叫んで居るけれども、実際真実に脚下を照顧するもの果して幾人有るのだら

う、「バイブル」に語がある、眼有る者は見よ、耳有る者は聞け！」

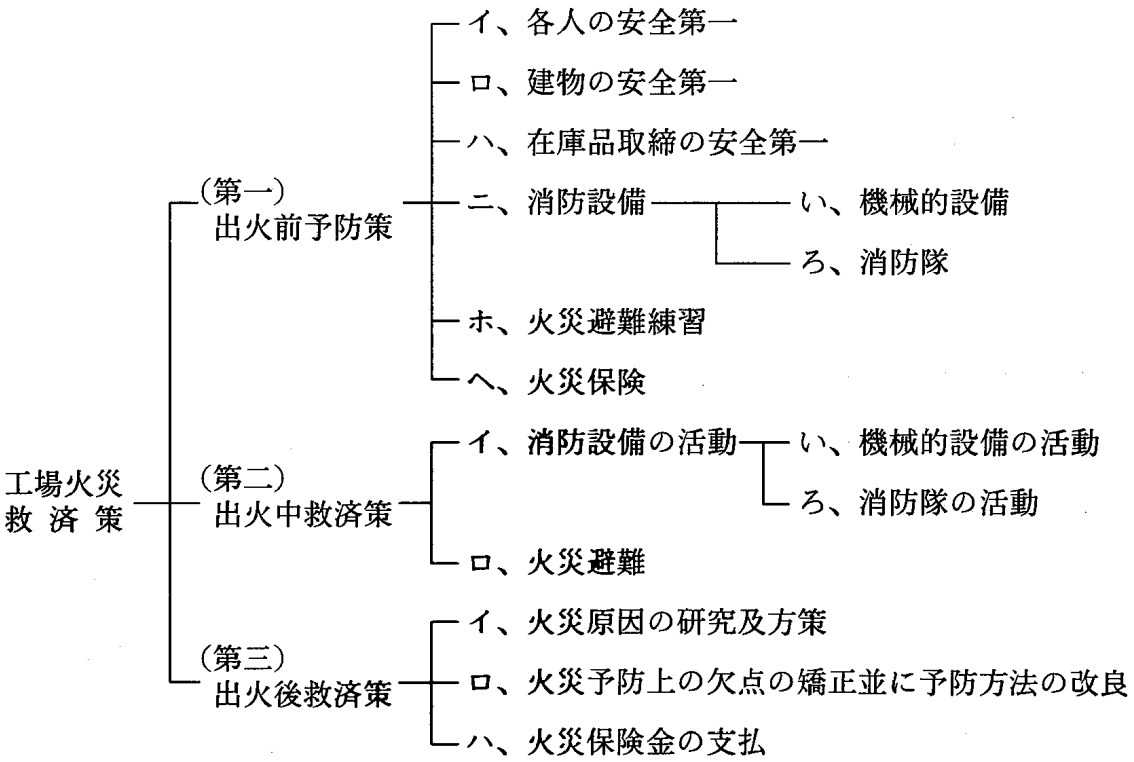
〔55〕

〔『安全第一』第2巻第4号、1918年4月、所収〕

工場火災と安全第一

法学士　蒲生俊文

内田会頭が連続して火災と安全第一に就いて述べられた後を受けて、蛇足の観なきに非るも、暫く会員其他の読者諸君と共に工場の火災と安全第一を研究して見度いと思ふ、忽卒にして案出して見るのに次の如き表は此安全第一の一般的方策である様に思はれる、元より熟慮の暇が無いから、洩れたるは後日の訂正に俟ち度いと思ふ。



〔26〕

私は今此表示したる凡てをカヴーして論ずるのでは無く、此中でも「第一」出火前の予防策、殊に火災避難練習について述べて見度い、私は出火前の予防策として先づ（イ）より（へ）に至る六個の条件を上げて見た、元より此はモツト精細に分類することも出来れば又モツト外の条件も有り得ると思ふ、只私が茲に上げたのは其大体に過ぎない。

各人の安全第一

各人の安全第一が凡ての根本であること云ふ迄もない事であるが、事の手始めに大体を述べて置き度いと思ふ、之を例ふれば乱りに喫煙殻を捨てたり、燃えさしのマツチ棒を捨てたり、其他凡て各人の行動が不注意怠慢にして火災を起し得る様な状態に在るのを排斥するのである、此頃米国でさへ安全第二になつて米国第一と云ふ事になつたと云ふて非難する人もあるけれども此は安全第一を知らない人の云ふ事で米国の如きも戦争開始以来特に国民安全協会は安全第一を呼号して無益の工場傷害を減少し国家の非常に備へんとしつつある、安全第一は米国に在つては米国第一であり、国家第一である、此等の事につまづいて居て安全第一の真価を疑ふのは不徹底の事を云はなければならない。

建物の安全第一

建物の安全第一と云ふのは建物其物が耐火的に出来て居る事である、例へば鉄筋コンクリートで建てるとか、緩（スローバンニング）焼材料を以て建造するとか、適当なる出入口を有してイザと云ふ時に避難に便することが出来るとか、防火扉を設置するとか、建物と建物との間に火道を作り得ない様に廊下を廃するとか、窓硝子はワイヤ硝子にするとか、工場付属の倉庫の建造も耐火的に建造するとか爆発性引火性の材料倉庫は家根を簡易にしてモシモの場合に上に吹き抜けられる様にするとか、或は材料の種類によりては雨水等の漏れ入る為めに発火するの虞なき様に計画すると

〔27〕

か、其他専門的に種々方法を挙げ得るであろう。

在庫品取締の安全第一

在庫品の種類によりては其性質上他の材料と接触することによりて発火するものもあるべく、硝石と硫黄とを同一箇所に貯蔵するも危険を生じ得べく、斯くの如く在庫品につきては一々専門的研究を遂げて万遺漏なきを期しなければならぬ、先年大阪安治川口の東京倉庫の爆発及大火災の如きも、見方によりては不注意極まるものと云ひ得るであろう、薬品に付いては薬品に関する専門的智識なくしては取扱の危険なる事丁度ダイナマイトを持て遊んで居た小児が此を火にかざして黒焦になつて死んでしまつた悲惨な出来事が有つたが其れと余り違つた処がないのである。

以上は在庫品其物の取締であつたが、凡て危険性を帯びた倉庫等に付いては特に取締を精確にしなければならない、携帯「ランプ」による火災の発生とか何とか云ふ様な事件は頻繁である、此は始めに述べた各人の安全第一中に包含さるべき事であるけれども特に茲に付加して置き度い。

消防設備の完全

消防設備につきては種々精細な説明も出来るであろうけれども今は只一般的説明として消防設備には人的及物的の二要素を必要とする、人的要素とは人其物の活動によるもので、物的要素とは消防を目的とする物其物である、故に各種設備は皆此二要素を併合して居ると云ふて差支ないと思ふ、即ち前掲の表に掲げた消防隊は人的要素の勝た設備で、機械的設備は物的要素の勝つた設備である。

機械的設備と云ふと自働撒水器の設置とか、各消火栓の配置とか、火災報知器とか、避難梯子とか、放水用梯子とか消火機、バケツ、毛布とか云ふ様な凡ての物的設備を茲に包含させて云ひ度いと思ふ、斯くの如き物的設備の凡てを完全ならしめるのは中

〔28〕

中費用もかかる事であるから凡ての工場に必ず設置せよと強制は出来ないけれども、此亦必要なる要件であると云はなければならぬ。

消防隊は人的要素を以て重なるものとし、物的要素を付随とするのであるが、消防隊は過去に於ては殆んど人的要素のみで成立して居た様な観がある、日本に於ける現在の一般的公共消防組なるものは又其遺物に過ぎない、纏を振つて火掛りをするのも考へ様では馬鹿に幼稚な感がする、消防隊も所謂肉弾的消防から漸次進化して機械的消防即ち物的要素の勢力を増大して来る順序であると思ふ。

消防隊と云へば一の団体であるから、其団体の活動をなすには最も機敏な活動をなし得る事を第一とする、其れには精神的条件、肉体的条件、組織的条件及び機械的条件の四条件を必要とするものと思ふ茲に精神的条件とは必ずしも消防隊に限らない、凡ての団体活動に於て必要とする処の団体精神である私は此を統一団体主義と名づけて居る、即ち団体に属する各分子が、各分子孤立した、所謂一騎打の活動をするのでなく、団体として統一した活動の一部分的活動を分担する精神を必要とする、此場合に各分子は団体としての生命が有るけれども、個人としての活動は制限されたものである、団体即分子、分子即団体の精神を涵養する事が必要である、昔の戦争の様に「我こそは……」と名乗りを上げて「イザイザ」で切り合ふのは今日の団体活動には不要であると思ふ、岡田三面博士の川柳に「源平は画になるやうに戦をし」と云ふのがあるが、其れは源平の昔であつて、今日の世には御用はない。

肉体的条件とは、云ふまでもなく、団体に属する各分子の肉体の剛健な事を必要とする、故に始め此分子を採用する際には充分体格の健全な事を吟味し猶其上に平常よく衛生を重じさせ、安全第一な生活をなさしめる事が必要である。

組織的条件は精神的条件中に入れてもよろしいと思ふが、今別に茲に掲

出する事にした、即ち団体活

〔29〕

動をなす為めの組織である、ツマリ各分子間の巧妙なる連絡とか、仕事の分担とか云ふ事を、無駄を除いた、簡便な、而かも要領を得た組織の下に規定して、活動をなす場合に宛かも、一個人の身体の各分子が何等の矛盾なしに一の身体として活動し得る様に、軽便、敏活になし得る様な組織を大切とする。

次に機械的条件とは、消防隊が使用する、消防用機械及器具である、此は外国でも漸次進歩して来て我国でも段々此を採用する傾向に在る事は大慶の事である、消防用機械及器具も、昔の一騎打の消防の時と比較すれば大に趣を変更せざるべからざるは理の当然である、殊に昔の矮小な家屋のみの時代と漸次西洋式宏大な建築物の多くなつて来た今日及将来に対しては其れに適合した機械及器具を必要とするのである、此が無ければ消防隊は手を空しくして眺めて居る外に道が無い。

最後に此頃の新聞に宮内省で、消防の練習をやつて襷をかけた女官が消火器を以て大活動をやつたと出て居たが、此の練習と云ふ事が必要である、工場に消防隊を設置しても、練習を欠くときは危急の場合に只狼狽へる外手の出し様が無い、故に工場に於ては平常適当な時期を見計つて時々消防隊の練習をやり、イザと云ふ場合に充分間に合ふ様に馴らして置く事が必要である。

火災保険

火災保険を茲は〔ママ〕上げたのは、只到底いけないと云ふ場合を予想して将来に備へる為めの一手段を茲に上げたのに過ぎない。火災保険とは如何なるもので如何なる方法を条件によつて此保険契約が締結され履行されるかの一事は今茲にはワザと略したい。

火災避難練習

最後に火災避難練習に就て述べて見る、小人数の処でも必要でない事は無いが、大人数集合して居る工場とか学校とか云ふ様な処では平常共非常の場合

〔30〕

に活動すべき掛員は其部署につくと共に、一方其多数の人を無事に避難せしめる練習を充分に行つて置く事が必要である、平生事なき時には大概の事はスラスラとやつてのける様な顔をして居る人が大事の場合には見苦しい醜態を演ずるものである、此れも一二人の事ならば大した事でも無いが、多人数が狼狽して居る時には不必要の惨害を蒙むる事が多い、此を平素よりよく馴らして一糸乱れず整然として避難するときは混雑を避け平易に安全地帯に退去する事が出来る、日本でも或学校では始めた様に聞いて居るが、川崎の東京電気会社ではズツト昔から此練習を行つて居る、大概毎週一回突然予告なしに此を実行して居る、而して火災一般については嘗て本誌（大正六年八月号参照）に掲載になつたが一の心得書を配布して其心掛を養ひ一方練習を怠らない、一度主任者が或地点に立つて呼子を吹くときは其人の立つて居る処を発火の場所と仮定し、各工人は其仕事を止め、瓦斯の如きは其火口を閉ぢ、腰掛の如きは仕事机の下に入れ、各自二列を作り、其仮定発火場所に遠き方面の出入口より整然として避難をするのである、此が一度避難をなし其建物の周囲を一周して後、再び二列の儘工場内に帰り来り腰掛を出し、瓦斯の火を点じ、而して種々の仕事に着手する迄に始めより終りまで約二分乃至三分を出でない、其機敏な事は驚くばかりである、此れ只練習の効果である、今此について一々其規則を茲に上げて述べないけれども、各工場各学校各官衙等此の要領を呑み込んで速に火災避難練習の実行に取掛ることが火災に対して無益の惨害を予防する

大切な手段であることは信じて疑はないのである。

〔31〕